

Citation: Buppasiri P, Lumbiganon P, Thinkhamrop J, Thinkhamrop B. Antibiotic prophylaxis for third- and fourth-degree perineal tear during vaginal birth. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2010, Issue 11. Art. No.: CD005125. DOI: 10.1002/14651858.CD005125.pub3.

CRG名: Cochrane Pregnancy and Childbirth Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 3 October 2010

Clib issue No.; N/U: 2010 issue 11, Update

背景: 1~8%の女性が経膣分娩中に第3度会陰裂傷(肛門括約筋損傷)や第4度会陰裂傷(直腸粘膜損傷)を経験する。これらの裂傷は、鉗子分娩後(28%)や正中会陰切開術後により多く生じる。第3度や第4度の裂傷は、直腸からの細菌により汚染されるようになることがあり、これは会陰創傷感染症の可能性を有意に増大させる。抗菌薬の予防的投与はこの感染症の予防にある役割を有する可能性がある。

目的: 経膣分娩中の第3度や第4度の会陰裂傷における母体の合併症や副作用の制御に対する抗菌薬の予防的投与の有効性を評価する。

検索戦略: Cochrane Pregnancy and Childbirth Group's Trials Register(2010年8月31日)、および抽出した論文の参考文献リストを検索した。

選択基準: 経膣分娩中の第3度および第4度会陰裂傷における抗菌薬の予防的投与のアウトカムを、プラセボまたは抗菌薬無投与と比較しているランダム化比較試験(RCT)。

データ収集と分析: 2人のレビューアが独自に論文を評価し、データを抽出した。

主な結果: 第3度か第4度会陰裂傷における分娩後会陰創傷合併症に対する抗菌薬の予防的投与(1回投与、第二世代セファロスポリン系抗菌薬、静脈内投与)の効果を比較した1件の試験(147例の参加者)を同定・選択した。2週間時点の出産後検査において会陰創傷合併症(創傷離開および膿性分泌物)は治療群8.20%とコントロール群24.10%に認められた(リスク比0.34、95%信頼区間0.12~0.96)。

レビューアの結論: 抗菌薬の予防的投与が、第3度や第4度の会陰裂傷後の会陰創傷合併症を予防するのに役立つことをデータは示唆しているが、追跡不能率が非常に高かった。これらの結果は1件の小規模試験に基づいているので、注意して解釈すべきである。

(監訳 江藤 宏美)

翻訳公開日: 2011年7月12日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。